

### <資料>小口千明『日本人の相対的環境観： 「好まれない空間」の歴史地理学』をめぐって

KINAMI, Kazuya / KIDO, Miya / HANDA, Miho / 城戸, 美也 /  
半田, 美穂 / 木南, 和也 / MIZUNO, Katsunari / 水野, 勝成

---

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

36

(開始ページ / Start Page)

73

(終了ページ / End Page)

76

(発行年 / Year)

2004-03-24

[資 料]

小口千明『日本人の相対的環境観 — 「好まれない空間」の歴史地理学—』  
をめぐって

城戸美也 木南和也 半田美穂 水野勝成

本書は、従来の人文地理学研究において、人間を同質に扱う傾向が強く、その質的側面の把握が不十分であったことに対する疑問を出発点とし、著者自身が蓄積した「好まれない空間」に関する研究成果をまとめたものである。

たしかに、土地の環境や個性を記述することから始まり、地表における現象の「多様性」に着目してきたはずの地理学は、収集された情報および知識を客観的に体系化するにあたって、あるいは一部の地理学者が方法論の追求に熱心になるあまり、人間と人間社会の質的側面という要素を軽視する傾向があったことは否定できない。地表における人間活動を研究対象とする人文地理学の分野でも、「多くの場合、検証することなく人間集団を等質的存在とみなしてきた」とされる。今日、宗教・慣習などを異にする民族間の紛争が、現代世界における大きな問題となっている中で、人間のもつ価値観や行動の多様性について地理学の立場から明らかにすることの意義は大きい。

本書の研究目的は、「景観形成の主体たる人間に着目し、その人間がもつ環境観の時間・空間的側面からみた相対性を具体的景観に即して明らかにすること」である。具体的には人々から「好まれない」との主観的判断を受ける空間を対象とし、それらの空間が時間的・空間的両側面からみて常に「好まれない」との評価を受ける空間であるか否かを検討するとしている。さらにいいかえれば、「好まれない空間」を通じた、人間のもつ環境観の多様性についての検討を、時間・空間の異なる複数の事例に沿って行った歴史地理学の研究である。

本書の構成を簡潔に述べると次の通りである。第1章「研究目的および方法」は、問題提起による序論が展開されている。第2章「相対的環境の

概念と「好まれない空間」では、主に理論的な検討を通じて、問題の所在、本研究の必要性などが述べられている。第3章「罪に関連した空間— 一行刑施設に対する認識像の相対性を事例として—」、第4章「凶兆に関連した空間（その1）— 一家相書において凶相とされる方角の相対性を事例として—」、第5章「凶兆に関連した空間（その2）— 寸法を尺度とした吉凶判断の欠如とその相対性を事例として—」、第6章「邪霊に関連した空間— 民俗行事にみるムラ境の相対性を事例として—」、第7章「危険性に関連した空間— 海水浴場における岩場と波の価値をめぐる相対性を事例として—」、第8章「不快感に関連した空間— 熱気浴にみる衛生観の相対性を事例として—」、第9章「他界に関連した空間— 忌言葉にみる他界像の相対性を事例として—」のそれぞれ第3章から第9章においては、具体的な事例をあげた研究報告および考察が述べられている。第10章「結論」では、各章のまとめと本書全体の考察、今後の展望が述べられている。

それでは、各章ごとに詳しくみていきたい。

第1章では、研究目的と方法が記されている。本書は、人々から「好まれない」と認識される空間（景観）に対して、その人々の認識（環境観）が時間的・空間的に相対性を有するか否かを検討することを目的としている。広義には、景観形成の主体である人間集団に着目して、その人間がもつ環境観の時間的・空間的な相対性を、具体的な景観に即して明らかにすることを目的としている。地理学において、人間とそれをとりまく環境は研究課題のひとつであるが、従来の地理学研究では、その人間集団を等質的存在とみなしてきたことを指摘している。そこで著者は、景観形成の主体としての人間集団をとらえるとき、その人間

集団を多様性・異質性をふまえた存在として着目する必要があることを繰り返し強調し、各章の事例研究のなかで実践している。研究の方法として、歴史地理学で必要とされる過去の人々の環境認識を明らかにするため、主観的価値判断を受けた空間を研究対象とし、事例を通じた実証的研究方法を指向している。

第2章は、既往の研究と「好まれない空間」の意味について書かれている。筆者は過去における環境認識の研究法の困難さを指摘している。過去の研究をふまえて、通時的な観点および共時的な観点から過去の環境認識像を明らかにすることを意図しているが、それを考察する研究方法は明示されておらず、その必要性を訴えるにとどまっている。

本研究で問題とされている「人々の主観的価値判断」の対象である空間のひとつとして、著者が「好まれない空間」という指標を選択している理由については述べられていない。「好まれない空間」については、人々はそれに明確な反応を示す傾向があるため、人々の主観的判断を把握しやすい性格をもつと述べている。また、「好まれない」という判断を行う人間の視点を、既存の研究をもとに①生物的存在、②社会的存在、③歴史的存在、④空間的存在の4つに分類している。本研究では、生物的存在(第4章から第9章)、社会的存在(第3章)としての「好まれない空間」について考察を行う、としているが、この分類が独立したものではなく、相互に関連したものであることを著者が指摘しているように、上記の分類はあいまいさが残る。

第3章では、現代においては身近にあってほしくない施設として人々に認識されている行刑施設とその周辺の空間が、明治期の北海道においては必ずしも「好まれない空間」ではなかったということを、いくつかの「集治監」と、それを中心として形成された集落を事例に検証している。明治政府の北海道開拓事業と密接な関わりをもつこれら「集治監」は、就業機会を増大する機能を持ち、行政・サービス機能を誘引し、娯楽享受の機会をもたらす存在として、移民人口を誘引し、その周

囲に集落を形成させる役割を果たした。また、囚徒は住民への奉仕を行う勤勉な労働者として感謝されていたというものである。行刑施設とその周辺の空間に関する人間の価値観の相対性は、現代と北海道開拓時代という2つの時代的・社会的背景の下で明らかにしている。

第4章では、埼玉県吉見町久保田中組において、生活のなかで伝承されている「富士向き」という方位観と、家相書のなかの方位観との対比から、人々の方角に対する環境観の相対性について検討している。ここでは、住居の向きと「富士向き」に対する認識を聞き取り調査と計測によって行っているが、計測による住居の富士向きの調査において方位の基点に関する記述あるいは考察が不足しているように感じる。また、「富士向き」の根拠として気候環境をあげているが、検証方法にあげた事例がどれもあいまいなものであり、残念ながら説得力に乏しい。また、鬼門、裏鬼門という方位観が、他地域ではどのくらい意識されているのかという実証もないので、この地域における「富士向き」が特別な認識とは言えないのではなかろうか。

第5章では、沖縄にみられる吉凶判断を行うためのものさしである唐尺を取り上げ、吉凶判断に基づく相対的認識像を考察している。日本では、空間的な吉兆判断を行う場合に方位が基準とされることが多かったが、ここではものさしによる長さという別の指標が用いられている点に興味がかかっている。著者は波照間島と与路島で、住居の門幅の吉兆を唐尺で計測し、住居環境の吉兆観が吉に合わせて作られたものであるとしている。しかし、与路集落における尺(さしがね)の吉と凶の割合で、計測結果は吉が66%という値がはたして有意なものであるかについて、吉を意識して建てられたとするには慎重な議論が必要であろう。また、沖縄と奄美の事例をもって、日本における伝統的な空間認識ということができるとは疑問が残る点である。

第6章では、茨城県桜村(現、つくば市)の虫送りの行事によって示されるムラ境と道切りが示すムラ境に関する人々の認識像の相対性を考察し

ている。著者は現地調査により、虫送りの巡回地点と道切りの地点をマッピングしつつ、虫送りのムラ境の外側に道切りのムラ境という二重のムラ境を分析しているのは評価できる点である。しかし、道切りの地点は各集落に2地点しかないため、ここからムラ境を特定することは難しく、ムラ境の二重性と解釈するにはデータや根拠がやや乏しいのではなからうか。

第7章では、過去と現在における海水浴場に求める好適な立地条件の相対性について、強い波指向という危険な場所における海水浴場の立地をとりあげつつ、当時、病気の治療目的であえて危険な場所に海水浴場がつけられたものの、レジャーとしての海水浴が普及するにつれて、立地条件が変容していったことを分析している。ただし、「海水浴場における波が強い岩場は、明治前期にはむしろ好立地条件として指向されたわけであり、ここに相対的な認識像の存在を指摘できる」は、明治前期の医療水準においては、海水浴の効用が現代よりずっと上（いわゆる相対的に）であり、逆に危険性の認識を上回ったと考えるべきではないか。その面では危険性の認識像よりも、海水浴の当時の効用（像）の相対性が認められるように考える。海水浴の目的が、医療から行楽へと変化していったことを明らかにした点は興味深い。海岸での日光浴を目的とする人々が多く見られる現代の海水浴目的の変化についてはふれられていないのは残念である。

第8章では、石風呂への入浴が他人の汗が自分に密着することが避けられないことから「好まれない空間」とし、その価値観を分析しつつ、衛生観の相対性を明らかにしている。もっとも、石風呂のみならず、公衆浴場など、他人の汗が自分に密着する可能性は否めない場所は他にも多く存在する。また、なぜ石風呂なのかという点も消化不良の感がある。たとえば、公衆浴場との比較やなぜ石風呂が瀬戸内海地方に多くみられるかという検討等についても触れられるべきではなからうか。さらに、著者撮影の石風呂の様子だけではなく、石風呂への入浴が他人の汗が自分に密着することが本当に避けられないものであるのか、また、

不快・不潔感が生じているのかどうかについても検討が必要である。単に「別の人間集団にとっては好感を抱き感謝の対象」だけでは不十分ではなからうか。もっとも、医療施設としての価値観に裏付けされた「不快」な条件を備えた空間の認識像は明らかにされたと考える。

第9章では、忌み言葉としての「ヒロシマへ行く」という表現を用いる人々の世界観の相対性を検討している。正誤性は別として、等語線の画定を行っている点は興味深い。また、「ヒロシマ」という語の起源を特定するには至らなかったが、「ヒロシマ」の認識像の段階を①他界の認識像、②商都としての広島、③被爆都市としての広島の三段階に整理し、その変遷を明示している。広島市だけが「ヒロシマへ行く」という言葉に死の意味を含めずに用いており、この理由について著者は言及していないが、おそらく広島の住民が、「ヒロシマ=死」のイメージが「広島=死」と結びつくことを避けたためと考えることができる。

第10章は、目的の再確認を経て、全体の総括と今後の展望が述べられている。「好まれない空間」として「罪」、「吉凶」、「邪霊」、「危険性」、「不快感」、「他界」を対象とする具体的事例による実証研究を通じて、その認識像の相対性を明らかにしたのは、従前の研究もなく、評価できる点であろう。もっとも、著者も指摘しているように、それらの事例選定の問題は全体を読み終えても残る課題である。すなわち、なぜその事例にその地域（空間）を取り上げたのかが今ひとつ明確ではない。ややもすれば、それぞれ単独の論文を寄せ集めた感を払拭するためにも、例えば全体を通した歴史的、通事的な検討も求められるのではなからうか。さらに、取り上げた事例の対象年代が明治前期や戦前戦後などバラバラな感も否めない。これらは本書が学位請求論文であり、第3章から第9章までがそれぞれ既発表の学術論文に加筆修正を加えたものであることから、共通のテーマとしての「相対的」環境感ないし認識像への論述に関する統一感が今ひとつ希薄であることに起因しているのではないかと思われる。ゆえに、既発表の学術論文それぞれを糊付けしていく、この共通テーマの「相

対的環境観」とはいったい何なのかという議論をさらに深める構成が出来なかったのか惜しまれる。

また、各章ごとに、その認識像の相対性の対象が、過去のある時期におけるものか、現代にいたるまで変容しつつあるものであるか、過去と現代の対比なのか、各章ごとに若干の違いがみられるのも気になる点である。調査データについても、富士向き家屋や石風呂施設をはじめ、やや古いものが多いので、今後、新たな調査による追研究も期待されよう。細かいことだが、3頁7行目の脱字や28頁14行目の数値と表の数値の不整合、64頁の図4-3の起点が表示されていない箇所が本書の全体の価値を落とすものではないものの、残念である。

今後の課題として、著者は次の3点をあげている。第1に、はじめに分類した環境認識の主体である人間の視点のうち、本書で取り上げられなかった歴史的存在、空間的存在という側面からの考察である。第2に、価値観変容の過程やそのメカニズムの解明である。第3に、民俗事象の発生、時代ごとの性格、変化の過程についての検討である。また、新たな研究の必要な点として、人間の健康上のコンディションというフィジカルな視点からの相対的認識像の研究をあげている。これらは、人間への関心が新たな分野に広がりをもせることを期待させる展望であろう。

全体を通じて、本書で展開されている歴史地理学の分野における理論的・抽象的な環境認識論

は、人間による空間評価の相対性について実証を試みたものとして高く評価されるべきものである。他方で、人間の主観的価値観をどのように客観的に判断するかという難しさを改めて再認識させる。本書の事例でも、対象の空間について、人間が行った「好む」「好まない」という主観的判断を、はたして総合的解釈のみで客観的に判断したといえるのかどうか、そうした総合的判断により、「好き」「嫌い」という最も基本的な価値観を軽視されてしまうのではないか、という疑念が残る。評者も冒頭で述べているとおり、地理学にとって人間集団がもつ価値観を同質的とみなすのではなく、異質性・多様性を包含する存在として理解することの必要性が本書の研究によって提示されたことの意義は大きい。それだけに、人間の本質を客観的にとらえ、実証するという困難な課題に妥協することなく今後も挑戦し続けてほしい。

近年、NIMBY (Not In My BackYard) という言葉が注目されている。米軍基地、原子力関連施設、ゴミ処理施設といった、近隣に来て欲しくない迷惑施設を指し示す言葉であり、本書のような「好まれない空間」に関する実証的地理学研究は、必要悪としてのNIMBYを題材として研究する場合にも適用可能な共通のアプローチ研究方法を導き出してくれるものと期待できるだろう。

#### 参考文献

小口千明 (2001) : 日本人の相対的環境観 — 「好まれない空間」の歴史地理学 —。古今書院。206p.